

公開シンポジウム

あしもとの歴史を見つめる—語り、書き、あらわす

民俗学では古くから人びとの歴史を記述するという営為を行ってきた。これは人びとが語り、書き、実践し、表現する歴史自体に価値を見出すというまなざしに特徴をもっている。また、今日の民俗学では、人びとの歴史や人生の語りなどを扱うことが方法論的に見直される機運が改めて高まっている。2019年は、新たな元号を迎える年となったが、同じく、昭和という時代を迎えたばかりの1930年、柳田國男は『明治大正史世相篇』を著した。そこで柳田は、人びとの日々の暮らしや人生が記録されずに忘れ去られることを恐れ、些末な物事こそを丁寧に記述していくことを試みた。その6年後に生まれた宮田登は、後年、歴史の主体を生活する人びとそのものに置く「民俗的歴史」論を掲げていく。時を同じくして高度経済成長の中で生活や地域を見つめる視点から市民運動が盛んになり人びとが歴史の主体となっていく。しかし、その後のバブル経済とその崩壊の中で社会は急激に変化し、人びとの価値観も多様化し、地域の歴史や文化も一つのものとしては語れなくなっていく。また、現代の生活は、就学や仕事の都合で生まれ育った地域から移動、転居することも多く、地域の歴史や個人の暮らしは仮想空間を含めた様々な時や場で断片的に語られ、再編され、意味づけられ、あるいは忘れられていく。こうした現状の中で、私たちは、民俗学の立場から改めて人びとの暮らしや人生、地域の成り立ちといったあしもとの歴史を振り返る必要があるのではないだろうか。

民俗学では、語られる声、書かれた文字、モノや空間、行為としてあらわれるものに着目し、人びとの暮らしや人生といったあしもとの歴史と民俗とを相互の関連の中で厚く記述し続けてきた。他方、社会学や心理学においても臨床的研究やナラティブアプローチによる生活史の中で人びとのあしもとの歴史が記述されてきた。語りについての議論は、そこから歴史を再現するだけでなく、その底流に流れる人びとの意識を紡ぎ、文字文化に関する議論は、文字が単なる「史実」をあらわす媒体ではなく、時代状況の中に生きる人びとが伝え受け継いできた文化そのものであることを明らかにした。アメリカでは歴史学や考古学とも連動するパブリック・ヒストリーが台頭したが、日本においても公共性や社会实践の視点から博物館や教育・行政機関との連携の中で人びとが主体となる歴史を踏まえた実践的な民俗研究が進められている。あるいは、文化財保護法が文化財の「活用」に大きく舵をとった現在、地域の生活の中で受け継がれてきたあしもとの歴史はどのようにあらわされるのか。民俗を生み出し、伝承し、実践する主体としての人びとが共有する歴史とそれに基づく様々な実践と表現について、今日の民俗学からはどのようなアプローチが可能なのであろうか。今、あらためて民俗学が記述してきたあしもとの歴史を問うことで議論を深めていきたい。

主旨説明

古家信平（筑波大学名誉教授）

人々の日々の暮らしや人生を記録することは、今日まで幾たびか方法論的な検討を経ながら、民俗学において継続的に行われてきた。教科書に書かれるような政治、経済、文化の大きな流れに対して、それと関連を持ちながらの個人の自然な生き様に関心を払ってきた。

一つ例をあげるならば、初めて上演されてから今年で300年になる沖縄の組踊は、中国からの冊封使をもてなすための宮廷芸能で、廃藩置県（1879年）後も古典芸能として命脈を保ち、本土復帰（1972年）に国指定重要文化財となる。一方、沖縄本島から八重山に至るまでの多くの集落に組踊が伝わっており、それは首里の士族の寄留や、旧士族で芸能をよくした者により定着し、琉球国時代の末期から各地に組踊の台本が散見される。

配役を争って敗れたものがいたたまれずにシマから出奔したとか、役がもらえず裏方ばかりだったことを恥じ入る日々を語るものや、周辺のシマの乙女心をわしづかみにした名優の話が語られる。

組踊をめぐる語りに加え、1ヶ月に及ぶ練習を経て演じられる場に立ち会ってみると、先輩からの指導に緊張が走る場面は見られ、「しまくとうば」（シマ言葉）が飛び交う中に外部の観察者に入り込む余地はない。語りに行動を加えることによって、組踊と同時に演じられる舞踊がシマの暮らしに大きな比重を占めることがさらに明らかになる。

研究者はシマの人々との互いの語りの場をあらためて確保し、さまざまな側面の文字化に至るまでの情報のやり取りが可能となる。事実関係の確認プロセスは重要であり、解釈の相違もあらわになるのがこの時点である。北部沖縄においては組踊の受容と同時期に門中制度が受容されていることや、土地制度の改変、徴兵制の実施といった歴史との関連を確認することも行われる。

「あしもの歴史」はすべての人々が個々に経験してきた歴史であり、固有のものでありながら孤立しておらず、相互に関連を持つ。そして、日記、絵画、写真、映像などで記録され、記録することができる。民俗を生み出し、伝え、実践する人々の歴史と、それが記録され表象されることについて、研究者はまず人々と接する場を一段と研ぎ澄ますべきであろう。人が表出する生理的反応とそれに裏打ちされた行動、さらにそれを説明する言葉に耳を傾けると、「あしもの歴史」は徐々に姿を現してくるものである。

【参考文献】

古家信平 2009「祭りの快楽」『日本の民俗』9 吉川弘文館／同 2018「沖縄の南北格差－辺野古の苦悩－」『別冊環 江戸－東京連続する歴史』藤原書店／同 2019「北部沖縄における伝統音楽の変容」『近代移行期における音楽世界の変容』ミネルヴァ書房

人びとが語る物語を聞き、書く
－沖縄県の民俗医療の事例－

東資子（一関市教育委員会）

民俗学の調査では、人びとの元に出向き、語ることを聞き、それを書き記し、主要な資料の一つとしてきた。聞き書きは長年、民俗学が培ってきた特徴的な調査方法である。とはいえ、だれに何を聞くのか、それをどのように書くのかは、その時代の民俗学の興味対象に従って変遷してきている。しかし、おおむね伝承をよく伝える「伝承者」の語りを聞いて、国や地域などの一定の枠内の共通性を前提とした「民俗」を描くことは、変わらず行われてきたといえる。

民俗学に隣接する歴史学においては、個人の語りを資料とするオーラルヒストリー研究が新たな方法論として注目されてきているが、個人をとおして国なり地域なりが共有する「歴史」を描くことを目指している点では、これまで民俗学が行ってきた聞き書きと重なるものでもある。

そのような中でも、顔のある個人の語りを意識した記述も模索されてきている。古くは、聞き手である自分も登場させて当時の主流の伝承者ではない女性の民俗を表した瀬川清子、それまでの民俗調査では取り上げてこなかったような個人史や、話者と聞き手の関係性までを書き記した宮本常一、また事例ごとにそれぞれ話者の情報を明らかにして個人レベルの民俗を積み重ねる野本寛一らの仕事がある。さらに、関一敏らによる個人を正面から取り上げ、分野ではなく話者の名前順に並べた市史の試みもあり、「民俗」を構成する個人の多様な歴史を明らかにする取り組みとなっている。

個人が語ることを、史実との差も含めて資料として評価できるのは、人文社会科学において1980年代以降に起こった「ナラティブターン」といわれる認識論的展開によってである。人は、「論理・科学的思考」の様式だけでなく、「物語的思考」によっても現実を把握しており、個人の語りは事実を反映するのではなく、現実を構成するものであることが理解されている。また、個人が語る物語は聞き手と共同で作られるものであり、つまり聞き書きは聞き手との創作物であることが所与の前提となっている。

この「物語」の視点からは、個人が語ることによって自分の歴史を作りあげ、語りを利用し、人生を営む動態を見ることができると考え、発表者が過去に沖縄県で行った民俗医療に関する調査から、事例を紹介する。

個人がさまざまな場所に移動し、多くの役割をもち、複数の場に同時に属している現在において、多様なあしもとの歴史を記述するすべとして、個人の語る物語を検討したい。

【参考・引用文献】

瀬川清子 1970『海女』 未来社／ 野本寛一 2019『近代の記憶』 七月社／福岡市史編集委員会
2010『新修福岡市史特別編 福の民』 福岡市／ブルーナー・ジェローム 1998『可能世界の心理』
田中一彦訳 みすず書房／ポール・トンプソン（酒井順子訳）2002『記憶から歴史へ』 青木書店
／宮本常一 1984『忘れられた日本人』 岩波書店／同 1993『宮本常一著作集 37』 未来社

伝承と文字文化 —民俗学的歴史研究の方法—

小池淳一（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学）

あしもとの歴史を民俗学的方法的な問題として考えてみたい。最初に日本列島社会における民俗研究としては、文字をあやつるのは調査者ばかりではなく、被調査者もそうであることを確認したい。あしもとの歴史は、文字との関わりにおいて双方向的なのである。

こうした問題を考える前提として、「口承と書承」という言い方が用いられることが多い。まず、この点について確認しておきたい。第一に「口承」（正確には〈口承〉）という語は、山田巖子が注意するように「口承文芸」の略語ではない。口承文芸研究のなかから、「声」を特権視せず、「文芸性」を自明視しないことから出発し、さまざまなメディアが輻輳する状態を前提に、「口承文芸」の枠組み以外の「声」の研究の可能性を模索するための用語である。その際に民俗調査は「声」をもとになされるという当たり前の現実も確認されていた[山田 2004]。だとするならば、「口承」とは民俗学全体の対象である「伝承」と同じ意味を持つか、その把握の場面と近接する術語であるということになる。

第二に「書承」という用語は、文字によって「伝承」が行われるという意味合いが込められているらしい。しかし、文字を書く、あるいは文字を用いるという行為には、もともと記憶を固定化し、情報や文化を伝えることが包含されている。書くことは「伝承」の一形態なのである。文字そのものが、生活のなかの諸事象を受け継いでいくためのツールであり、継承は、文字文化が本来持っている特質のひとつとすることができる。だとすると「書承」という奇矯な語を用いずに、簡明に「文字文化」として、その環境や場、用具や種類を考えていきたい。

そして、以上をふまえて、第三に「口承と書承」と対にして表現することでなにがしかの広がりや新たな領域、研究上の課題を指し示すかのような思考にも立ち止まっておくべきだろう。「口承」は民俗学が重視してきた「伝承」概念の革新性に立ち戻るための用語であり、より広くは「伝承」を用いるべきだろうし、「書承」は文字をあやつる文化総体をさすのだから、「口承と書承」は、ここに掲げたように「伝承と文字文化」とした方がわかりやすいだろう。

そこで改めて主張したいのは、文字文化は伝承という行為の一部であるという視点である。文字をあやつる行為は伝承に包摂される。そのある種の「あたりまえ」を、あしもとの歴史を考えるとという目的に添って整序してみたい。ここではまず、①ライフヒストリーにおける文字資料はどういった位置を占めるのか、極私的な経験をもとに述べてみたい。次に、②文字資料を伝承のなかに位置づけようとする、どのような特色を見出せるのか、具体的に[小池 2011]で扱ったような資料をもとに考えてみたい。一見するとこの二つは異なった位相の問題であるようにも思われるが、そうした位相差自体を民俗学的歴史研究の可能性として積極的にとらえていきたいと考えている。

【参考・引用文献】

小池淳一 1996「民俗書誌論」（須藤健一編『フィールドワークを歩く』嵯峨野書院）／同 2011『陰陽道の歴史民俗学的研究』角川学芸出版／山田巖子 2004「口承—〈口承〉研究の展開—」（『日本民俗学』239）

地域博物館における「語り、書き、あらわす」ことの意味について

清水満幸（萩博物館）

報告者は、江戸時代の城下町を起源とする地方都市の公立博物館において、生活文化担当学芸員として30年余勤務してきた。その間、民俗学を学んだ者として、そして一人の住民として、民俗や地域そのものを継承していくことに関わり得るのかという課題を持ち続けてきた。

報告者の勤務する博物館は、15年前のリニューアルの折りに、博物館整備と同時に構想された「まちじゅう博物館構想」という行政のまちづくり構想の中で、地域継承の中核装置として位置づけられ、ひとづくりやまちづくりに貢献することを理念として掲げることとなった。

「まちじゅう博物館構想」は、本物の歴史文化や自然が息づく「まちじゅう」を、広い屋根の無い博物館と見立て、そこに住む人がスタッフとなって、主体的にそれらを現地であるがままに活用しつつ保全継承することを一つの目的としている。中核の博物館は、地域を掘り起こし再発見したことを地域の人たちと共有し、地域を支える人を増やすことが重要な役割となる。

そこで生活文化担当学芸員としては、設置理念に沿って民俗の掘り起こしや共有の取り組みを進めるのだが、民俗学を学んだ学芸員として戸惑いを覚える状況にしばしば遭遇する。

例えば、ある民俗について、それを伝える地域の人たちから意味や意義について問われる場合がある。民俗学の成果により見えてくるものは有るが、そこには学芸員自身の解釈が加わっており、それを当の人たちに伝えることで新たな伝承が生まれないかという危惧を覚える。また時には、地域で希薄となりつつある伝承について、地域の人たちから、記録者である学芸員に確認を求められることもある。もちろん、地域の人たちに共有が望まれることは伝えるが、伝えなかったことの中に重要な意味や意義が有るのではないかという思いにもさいなまれる。

他にも、ある時期に何がしかの意図が働き新たな伝承が付加された民俗について、求めに応じて、公立博物館としてその歴史や民俗学的意味を述べねばならない場合がある。例えば、江戸時代から続く奉納奴行列では、明治維新から半世紀を経た頃より「大名行列」と呼ばれるようになり、大名行列を起源とするという意識が持たれるようになる。また、記録によれば230余年も続く和船競漕で、ある時期より、藩の水軍教練の名残で300年以上の歴史を持つと伝えられるようになる。それらは今や、昔から変わらぬ伝承として民俗を担う人たちにとって誇りとなりつつあるが、記録や調査の成果に基づけば、公的に述べることができる範囲は限られてくる。

民俗に変容をもたらす時代背景や権威付けを求める心意等については、博物館として記録を残していくことになるのだが、地域の人たちに対して、どこまで語り、書き、あらわすことができるのか、そしてそれを、どこまで民俗や地域の継承に結びつけることができるのか、戸惑いを覚える。戸惑いに対する結論は見出せないが、一つ言えることは、民俗学を学んだ地域博物館の学芸員は、民俗の記録者であり、翻訳者であり、時に伝承者であり、場合によっては創造者になるということである。地域博物館学芸員は、少なからず民俗や地域の継承に貢献し得るが、語り、書き、あらわすことについては、及ぼすところを常に自覚することが必要となる。

【参考文献】萩市郷土博物館（編）1996『古萩町大名行列調査報告書』萩市／清水満幸 1998「天神祭り考～萩市金谷天神宮祭礼についての分析、その1～」『萩市郷土博物館研究報告』8号／清水満幸 2008「金谷天神祭り」『山口県の祭り・行事』山口県教育委員会